

調査全体の目的としては、老人のくらし方や人生観とゲートボール参加との関係と明らかにすることにあるが、ここでは特に、家族や地域社会との関連に絞って発表する。

〔調査1〕ゲートボール競技の歴史と普及過程について、全国11都県20市区町村への聞きとり調査及び全国への質問紙送付調査。1980.12.~1981.3.（原ひろ子と一部共同）

〔調査2〕老人の健康（特に医療費）とくらし方について、静岡県掛川市、1982.3.に面接聞きとり調査、対象618名（明治39年4月~大正3年3月生まれ、調査時68~75歳）本発表における分析対象者は内、ゲートボール参加者：男108名、女132名、計240名、ゲートボール非参加者：男120名、女78名、計198名、合計438名。さらに、対象者の家族への質問紙配布調査を並行して実施した（回収率は分析対象者において約95%）。以上の調査は、東大医学部大井研究室（衛生学）、お茶大家政学部伊藤研究室（家庭経済学）、原研究室（文化人類学）との共同プロジェクトによって行われた。このプロジェクトでは同じ対象者の三年間の医療費調査と合わせて行なっているが、本発表では主としない。

〔調査3〕ゲートボールへの熱中の構造を生活史や人生観の聞きとりにより明らかにするもの。対象は掛川・川崎・新橋・町田の4地域から各6名づつ、計24名（調査時70~74歳男女半々）。1982.8~10.（この研究は1982年度お茶大家政学修士論文となる）

結果 ゲートボールは孤独な都会の男老人を最も救い、仕事のない老人の同居家族からは喜ばれ、非参加者の家族もゲートボールに好意的だが、仕事のある老人では趣が異なる。その他、細かい項目においても家族や地域との関連で若干の興味深い結果を得た。